

歴史・文化の薫る川づくり

国土交通省 河川局河川計画課 河川情報対策室
課長補佐 藤井 政人

1. はじめに

毎年、『夏』という季節になると、いい意味にも悪い意味にも水に関わるニュースが目につくようになる。思いっただけでも、川や海での水浴、河川敷での花火大会、舟下り、打ち水、水の事故、台風、大雨等々。この季節には『怪談』もつきものだが、その中にも雨や川、池、湖などにまつわる話が多い。そのくらい我々『人』の生活と『水』とは関係が深い。

国土交通省では、平成12年から12回にわたり『歴史・風土に根ざした郷土の川懇談会』を開催してきた。平成15年5月には『日本文学に見る河川』をとりまとめ公表し、現在、最終提言のとりまとめの最中である。

本稿では、これに先立って、『河川』と『歴史』・『文化』の関わりについて、私見を述べてみたい。

2. 歴史・文化の薫る川を目指して

1) 川に関わる最近の状況

日本の川は、大陸の川とは異なり、源流から河口までの短い距離の間で瀬や淵、滝など様々に変化している。これらは、視覚だけでなく、聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感を刺激して人々の感受性を豊かにし、文化を育ててきた。

また文化は、それぞれの時代背景とともに生まれ、歴史が刻まれると同時に文化も留まることなく成熟し、より厚みのある日本独自の文化として確立していった。

しかし、高度経済成長期を経て歴史とともに刻まれてきた風景や生活様式を短時間のうちに一変させた。そのため、数千年の歳月をかけて育まれてきた川と日本文化との関係に綻びが生じ、川は、身近にありながら人々の記憶から忘れ去られた単なる水路となり、川とともに育まれてきた歴史や文化も、川とは関わりが無いものと見なされつつある。

川に関わる最近状況をまとめると以下のような

① 高度成長期に代表されるように少し以前まで、社会も川も単一機能的な目的達成がなされ、他の面もあわせた総合的な価値が失われた。川そのものが単調になり自然性も失われたことにより魅力が薄れたり、川を流れる水が清廉でなくなったり、人が近づきにくい構造となったり、川に背を向けるような

都市空間となったりした。

② 川が歴史・文化の素材をせっかく持っているにもかかわらず、あまり知られていない場合が多い。

③ 川との関わりが希薄化は、いくつかの問題を招く。一つめは、自然環境からも生活環境からも、地域ぐるみで自分たちの川としてマネジメントされることが重要となるが、そうした意識が薄れてきているということ。二つめは、近年の災害からも、防災の面で自助・共助が大切であることが再認識されたが、日頃からの川との関わりが薄れていては洪水などの緊急時に機能しないということ。

2) 社会全体の最近の状況

一方、21世紀を迎えた今、やすらぎや癒し、景観・環境重視といった、物質的のみならず精神的にも真に豊かな社会の実現が求められている。こうした価値観の変化は、川と人との関わりにおいても例外ではない。

① 物質的に豊かになった現代人にとって、心の安らぎや潤いといった真の豊かさを求めるようになってきている。

② 余暇の過ごし方として、身近な土地の日帰りでの散策など、歴史や自然を訪ね歩くような楽しみ方が急激に増大。また、観光地においても、知的刺激を受けるような質の良いものや、昔の精神に触れるものが望まれるようになってきている。

③ かつてのまちづくりは、全国画一的なミニ東京的機能確保が指向されてきたきらいがあるが、最近では個性ある地域づくりを目指すようになってきている。

④ 歴史・伝統・文化を大切にする国民性の論議が高まっているほか、地域づくりや地域経営の中で役に立ちたいと考えて活動するボランティアや団体が増えている。

3) 歴史・文化の薫る川を目指して

以上のような状況等を踏まえ、歴史・文化を見直すことは、今後の日本社会の発展を牽引していく力の一要素でもあり、今後の国づくりにおいて極めて重要であると考えられる。

それでは、我々に何が出来るのか。

具体的には、以下のような施策が考えられる。

① 「知ってもらおう」

川は人との関わりがあって、川そのものが歴史・文化を育む母体となり題材となってきた。川にまつわる情報を調べて知ってもらい、川そのものに歴史

・文化が貯蔵され残っていくようにするため、川にまつわる歴史・文化を掘り起こし、より知ってもらい、継承していく。

② 「感じてもらう」

まちと川、川の中を人の歩く動線（フットパス）で繋ぐ、川やその周辺を魅力ある空間にする、川の現地で歴史・文化の情報に触れやすくする、どこに行けば川の何を知ることができるかもすぐわかるようにする。

③ 「育む」

これまでの歴史・文化だけでなく、今後の歴史・文化が育まれるようにすることが必要。人との関わりがあって歴史・文化が形成されることを考えれば、人が近づき活動しやすくする工夫するとともに、川を舞台として文化的な活動が行われやすくすることも考える必要がある。また、個性豊かな川にする、川を活かしたまちの個性を向上させるように関係機関とも連携していくことが必要である。

併せて、各地域の歴史・文化は、それぞれの地域の人々により支えられるものであり、ガイドをしていただく人のネットワークづくりなど、歴史・文化の薫る川をマネジメントしていく人の育成が重要である。

3. おわりに

私個人として『川』というと、故郷の「長良川」であり、赴任した先の「沖縄の各河川」であり、初めて管理職を経験した先の「江戸川」であり、「利根川」である。どの川にも例外なく歴史があり、文化があり、それにまつわる地域の生活があった。

しかし、私が子供の頃と比べると川との関わり薄くなっている、と感じるのは何故であろうとずっと感じてきた。それは、私が子供ではなく、大人になってしまったから、と思ってみたが、どうやら私も現代社会の一構成員であることには変わりはないようだ。

先年、子供と一緒に近くの川に遊びに行く機会があった。「手賀沼」に流れ込む「大堀川」という小さな川だが、最近徐々にきれいになってきたという評判である。その川で子供たちと一緒に遊んでいたときの気持ちを思い起こしてみると、何とも言えない高揚感・満足感がよみがえってくる。よくよく考えてみれば、丁度それは、子供の頃に近所の友達と川で遊んでいた頃のような気分であったような気がする。

誰もが同じような思いを味わえるとは思わないが、一人でも多くの人が、自らの五感をフルに活用して、『川』を身をもって味わって頂けるような施策を展開できればと考えている。

